
FAIRYTAIL ~二つの心を持つ者~

月の歌姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FAIRYTALE ～一つの心を持つ者～

【作者名】

ZZード

N7684Y

【作者名】

月の歌姫

【あらすじ】

FAIRYTALEのお話ですっ！～
ぜひ、読んで下さいね

#01 「ジヤンとの出合」（漫畫セ

作者「先にじつておもつか……ジヤンはオリキャラです……！」

ハッピー「なんで、それ言ひの……！」

作者「それが私だから……！」

#0-1 「ジヤンとの出合」

時は夕方、ある森の手前に馬車が止まっていた。

「お嬢ちゃん、起きてくれるかい?」

そう言って、馬車の主は少女の体を揺さぶり、起こそうとする。しかし、少女は起きそうにない。

(シーオーン。おーきーなーよー)

それを見ていた赤い髪たてがみを持つ幼童が、腰まで届く灰金の髪アッシュクロンドの少女シオン・クラウディオに伝えると、やつとシオンは体を起こした。

「うへ……もう着いたんですか……?」

シオンは眠そうに目を擦りながら主人に聞く。

「ん~……着いたってワケじゃないんだけど……ここからはずれきでこってほしいんだ……」

申し訳なさそうに主人が言つた途端、少女の目つきが変わり、尋ねる。

「なにかあつたんですか?」

「うん……この先に人狼の盗賊がいてね……この辺りの村は、ほぼやられてるんだ。本来なら……お嬢ちゃんの目的地まで送り届けてやりたいが……」

「その件で……泊まるはずの宿まで襲われた……とこいつとですか?」

「ああ…。すまないなあ、お嬢ちゃん…」

馬車の主は申し訳なれりつに頭を下げる。

「別に構いませんよ。それに…無理言つて乗せてもらつたのは私の
ほうですし…」

シオンがそう言つと、主人は頭をあげた。

「もうだつたね…。私は戻らなきやいけないが…」
「あ、大丈夫ですよ？私、それなりに強いので…」
(アレ…それなりつてレベルじゃないよね?)

主人が心配そうにシオンを見ると、シオンは笑顔でそう答え、いつ
の間にかシオンの腕のなかにいたフリーはツッコんだ。

「なら…いいんだが…。それじゃあ…気をつけてね」

そう言つて、主人は元来た道を戻つて行つた。

* *

「…行つた…よね？」
「行つた…ね」

馬車が去つた後、シオンはフリーに尋ね、フリーはそれに答えた。

「…じゃ、ケロちゃん、バッボさん、もつ出できてもいいよ」

そうシオンが言った途端、シオンの腰に付いているポーチからは、羽根の生えたオレンジ色のヌイグルミが現れ、右腕のブレスレットが銀でできたケン玉（？）がになり、同時に言った。

一息ビックタリだね、ケン玉さんとケルベロスは……

息ビッタリな一人(?)を見て、フリーが感想を述べる。

「ワシはケン玉ではない！バツボジや馬鹿者

「バツボ…頼むから大声出さんといでや！…耳、痛くなる！…」

ケン玉扱いされ怒鳴るバツボに、ケルベロスが注意する。

「すまん、ケルベロス殿。つい怒鳴つてしまつて

わが二てくれればええんや

と、良い雰囲気なのにも関わらず、フリーが言う。

「やー、ケン玉怒られた」

「フリーのせいじやろーやろー！？」「

ノルマの定義

その瞬間、辺りの温度が下がったように感じた。

オンがいた。

「フリー？ ふざけるのも大概にしないと… 私、怒るよ？」
「…スイマセン…！！！（汗）」「

三人（？）の謝罪の声が響き渡った。

＊＊

その3時間後…、辺りは闇に包まれ始めた。

「すっかり暗くなっちゃたね…」

「ウム…もうすぐ夜になるな…」

「どうか、泊まれるところあるかなあ？」

「「「うーん…」」「」

フリー・バッボ・ケルベロスの三人（？）が相談していると、

「…野宿になる…力ナ…？」

と、遠い田でシオンが言つ。

（（（不味い……）））

こうこう時のシオンは暴走する。

それを理解すると、三人（？）はすぐ行動を起こした。

「うんゴメン、シオン。お願ひだから戻つてきて…（泣

「だ、大丈夫やてー絶対に泊まるところ見つかるて…（汗

「ウ、ウム…そうじやぞ、シオン嬢…希望を捨ててはならん…」

「…わかつてまーす…」

（（（ぜ、絶対わかつてない……）））

カムバックして

三人（？）が諦めかけたその時、

「キミ、どうかしたんスか？」

その声の主は、三人（？）にどうては救いの神だった。

* *

声をかけてきたのは、シオンより4つ年上の12歳の少年 ジヤンだった。

ジャンは跳ねた黒髪に黒目の中年だった。

ジャンは、この辺りで母親と一人で農作物を育て、それを食べたり・売ったりで暮らしているらしい。

シオン達はジャンとそんな会話をしながら、彼の家に向かっていた。

「へえ～マグノリアへ行こうとしてたんスか…」

「はい…でも…「いいんスよ」…え？」

シオンが答える前にジャンは遮ると、続けた。

「わかつてんんス…あいつらのことは…」

ジャンは、そつ置つて俯いたが、すぐ咳払いをし、伸びをした。

「さて～早く家に行こう～ス～～ウチの母ちゃん、怒るとメツチャ怖いんスよ～だからほら～～！」

「わっ！？」

ジャンはシオンの手を引っ張つて、自分の家へと向かつて行つた。

シオンに見えないよう…涙を隠して…。

しかし…シオンはその涙に気付いていた…。

#01 「ジャンとの出会い」（後書き）

作者「次回はナツとハッピーが登場する……かも？」

ナツ・ハッピー

「何故に疑問形！？」

「いや～食った、食ったあ～」

「も、もう食べれんな～」

「おなかいっぱいだよ～」

「…みんな、食べてすぐ寝ないで…。行儀悪いから…」（汗）

ジャンの家で夕飯を食べ終えた直後、横になつた三人（？）に、シオンは注意した。

「別にいいっスよ。それよりシオン…汗、流してきた方がいいっスよ

「えつ？いいんですか？」

「ええつて、ええつて 女の子は清潔第一なんやから」

そう言つたのはジャンの母・ジョーンだ。

ジョーンはジャンとは違い、ベージュの髪に黒目だった。だが、目は同じだった。

「じゃあ…呼ばれますね」

シオンは笑顔でそう言つて、風呂場に向かつた。

＊＊

「う～…気持ちいい～」

シオンは風呂…といつてもドライ沐浴がだつたが、堪能していた。
そんな時、頭に男の声が響いた。

(…相変わらずガキだな…お前は…)

(あれ?シロンが話しかけてくるなんて…珍しいね?..)

シオンは驚く様子もなく、心中で相手の男性 シロンに言った。
といつても…シロンは人間ではない。
太古の昔、この世界を生きていた伝説の生物、レジエンズの一人だ。
今彼は、ソウルドールと呼ばれる水晶の中から念話テレパシーで、シオンに話
しかけていた。

(俺が声かけちゃあいけねえのか?)

シロンはシロンの言葉にムッとしたようで、シロンは慌てて言い直
した。

(ち、違つ違つ…
ダメつて訳じやなくて…ほら、念話テレパシーで会話するのって初めてだなあ
つて…思つただけ…)

シロンは暫く経つて、

(…言われてみりやあ、そうだな…)

と言つたところをみると、納得したようだ。

シオンは胸を撫で下ろしてため息をつくと、再びシロンが尋ねてき
た。

(で、お前は何悩んでんだよ?)

* *

シオン side .

ストライクゾーン
直球、まさにそれだつた。

シオンは目を細め、雨除けの天井を見上げて言つた。

(… なんでわかつたの?)

(アホか。もう 3 年も一緒に行動してんだ。分かるに決まってんだ
ろ?)

3 年。

もう 3 年経つのか。あの牢獄から、の人達に助け出されて。
そして、シロン達の力の制御者になつて、3 年、か。

(シロンが気付いてるつてことは、グリードー達も気付いるよね…)

(… 僕つてそんなに信用度低いのか?)

(うーん、私の中だと、うん、低いね)

(… ズバツと言つた)

声音からして本当に傷ついているようだ。シオンは悪く思い、謝ろ
うとした。しかし

『 田頃の行いのせいじゃないのか? 』

と、彼もう一人の自分の声が響いた。

シオンは肌身離さず持ち歩いていた紫色に輝く宝石が付いたペンダントを目線に上げた。

「……シンさん、今の言い方はないとおもつよ?」

突然した声に、シオンは注意した。

途端、もう一人の自分…否、もう一つの意識は鼻で笑い、言った。

『事実だろう?あの白き風（ワイングドライ風）を司る竜は理解力が乏しいからな…』
(…シオン、今シン…なんて言いやがった?)

今伝えたら不味い…といつか噴火寸前のシロンに伝えてはいけない。シオンは直感でそう感じると、なにも言ってないと伝えたが…

(シオン…嘘はいけねえなあ?あのやろひ…せつてーなんか言っただろ?)

噴火寸前のシロンに気圧され、白状した。

(…理解力が乏しいって言つてました…)

(…………おい、シン。後でツラかせや)

『ほつ…自分の主人（あるじ）を傷つける氣か?』

(あ、あ、?テメエが売つたケンカだろひ…(いい加減にせぬか!ウインドライゴン…!)

と、凜々しい女性の怒鳴り声と拳骨の音が響いた。

恐らく、シロンと同じレジョンズのガリオンが拳骨を喰らわせたのだろう。

(全く…大丈夫か?シオン)

（私は大丈夫だけど…シロンは…）

（問題ない。そんなことよりシン…あなたはどういうつもりなの
だ…？）

『フンッ…俺がどのようにこいつと…俺の勝手だれつ?』

シンのその言葉についてシオンがキレた。

（シンちゃん…それくらいにしてくれないかな…？）

その一言だけで十分だった。
シンも怒らせてはならないことを熟知しているので、すぐに引っ込
んだ。

（ガリオン、シロンに話つておこて…シンちゃんの言葉にのんなつて
…）

（わかった…それより…早く出なくてよいのか？）

ガリオンのその言葉に、自分が風呂に入つていたのを思い出したシ
オンであった。

シオンは慌てて風呂から出ると、ジャン達がいる居間へと向かった。

* *

居間でシオンがジャンと話していた時だった。
音が聞こえた。

「…」

最初に気付いたのは、シオンだった。

「シオン、どうしたんスか？」

「しつ……何か妙な音が聞こえる……」

何かを齧る音と、噛み返す音、飲み下す音。
それらが外 煙の方から聞こえてきた。

「ヤツらがきたみたいっスね……」

そう言つてジャンは、席を立つた。

「およしょジャン！今度こそ殺されちまうよーー！」

「大丈夫っス！母ちゃんはシオンと隠れてるっスーー！」

そつ言つて扉を勢いよく開けると叫んだ。

そこにいるであろう者達に……

「い、いい加減にするつスこの怪物兄弟！……オイラん家の烟をこ
れ以上荒らすんなら……？」

しかし、そこにいたのはジャンの知つてゐる者達ではなく

「……ア、アンタ……誰っスか？」

桜色の髪に鱗模様のマフラーを身に着けた少年と翼を生
やした青猫だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7684y/>

FAIRYTAIL ~二つの心を持つ者~

2011年11月29日17時50分発行